

## &lt;前回&gt;オリエンテーション

1. 近代の思想状況と自然神学
2. 形而上学批判と形而上学再構築
  - 2-1: ハイデッガー・解釈学 6/4, 11
  - 2-2: ホワイトヘッド・プロセス神学 6/25, 7/2
3. 自然神学の新しい動向
  - 3-1: クレイトン 7/9
  - 3-2: マクグラス 7/16
  - 3-3: 意味論・言語論 7/23

**Exkurs**

- 人文学の新しい可能性——キリスト教の視点より 5/14, 21  
 科学技術の神学にむけて——現代キリスト教思想の文脈より 5/21, 28

## &lt;前回&gt;ティリッヒの科学論

## (1) 近代の弁証神学とティリッヒの科学論

2. ティリッヒ
  - ①近代人・教養市民層におけるキリスト教的伝統への批判に対して、学問論・科学論のレベルで応答すること。
  - ②労働者階級のキリスト教・キリスト教世界への批判に対して、社会改革への参与などを通して実践的レベルにおいて応答すること。
6. ティリッヒの学問論・科学論：19世紀と20世紀とがいわば交差する地点。「学の体系論」

## (2) ティリッヒの弁証神学の形成過程

1. 「文化の神学」(Kulturtheologie) 構想
  - 1) 宗教と文化の関係の再構築
  - 2) 「文化の神学」の三つの課題：哲学／思想史（精神史）／体系論（規範形成）
2. 『ベルリン講義』
3. 弁証神学プログラムの全容

## &lt;文化の神学&gt;

- 構想：『文化の神学の理念について』（1919年）  
 基礎論（学の体系論・科学論）：『諸学の体系』（1923年）  
 宗教学の体系（宗教哲学／宗教史・宗教類型論／規範的宗教学＝教義学）：  
 『ベルリン講義』（1919/20年）、『宗教哲学』（1925年）、『マールブルグ講義』（1925年）

## (3) 1920年代の体系論と神学の科学性

1. 学の体系論の可能性
2. 体系の内実と形式
3. 認識の原理から、学の体系へ
11. 心的内容などの実体化（自然的態度）を括弧に入れ、純粹意識の領野における志向相関を直観的に確保しつつ、記述することによって、認識を構成する本質的要素として取り出されたのが、思惟と存在である。これら二つに第三の要素として精神を加えた三つの原理——「我々は思惟、存在、精神の三つのもを諸学の体系の基礎」（*ibid.*, S.121）とする——から、諸学の体系の全体像（思惟科学、存在科学、精神科学）。
  - ①思惟科学、ないしは観念的な諸科学：論理学、数学、現象学

②存在科学、ないしは実在的な諸科学：実在の三つの種類としての法則、形態、系列  
法則科学／形態科学／系列科学

③精神科学、ないしは規範的な諸科学

#### 4. 神学とはいかなる科学か

神学は、諸学の体系の内部において、次の二重の仕方によって規定され、それぞれに応じた科学性が問題となる。まず、神学は精神科学に属する一科学である。精神科学の一つとして、高度に専門化された学科であって、それ固有の専門領域と科学性を有している。諸学の体系内の位置に応じた特殊性と科学性を持つ点で、神学は他の諸科学と同等であり、諸科学との体系的な整合性ぬきに、神学の科学性は理解できない。ここでティリッヒは自由主義神学の線で神学の科学性を論じている。しかし同時に、神学には、神律的という精神的態度が結びつけられている。神学とは神律的体系学であって、諸学の体系の内実を直接主題化する神律性にこそ、神学と他の諸科学との決定的な相違が認められねばならない。つまり、神学の科学性は、単に諸科学との整合性にのみ見出されるのではなく、諸科学が共通に前提とする諸学の体系の内実との関係性というもう一つ別の基準によって理解されねばならないのである。

#### (4) 後期ティリッヒの科学論と神学

##### 1. 「相関の方法」における神学と科学

後期ティリッヒ：哲学概念の展開が、神学と哲学との関係理解にも影響を及ぼし、哲学に諸科学に対して、いわば特権的位置を与えるものとなった。

「科学的探究と神学との間の接触点は、科学と神学の両者における哲学的要素のなかにある。それゆえ、神学の特殊な科学に対する関係の問いは、神学と哲学の関係の問いに統合されることになる。」(ibid., 18)

14. 哲学的要素：問いの定式化の側だけではなく、答えの定式化にも関わっており、哲学の位置づけは決して単純ではない。つまり、キリスト教のメッセージを状況の問いに対する答え「として」解釈すること自体、哲学的解釈学的作業であって、キリスト教思想の科学性がこの解釈学的構造において具体化されるという点で、後期ティリッヒの科学論はまさに解釈学的である。

##### 2. 相関の可能性と積極的意義

16. 共通基盤(common basis)と共通根拠(common ground)の区別。

- ・神学と諸科学の間にも対立は起こりえない。
- ・神学と哲学との間における対話の成立。

##### 3. 科学論の再構築

18. 宗教と科学、キリスト教神学と自然科学との関係：図式的に言えば、「未分化→分化(専門化・内的緊張)→分裂(分離・対立)→区別→協力・再統合」という順序で進展。

19. ティリッヒ：対立、寛容(区別)、協力・再統合を、過去、現在、未来と対応。

20. 「宗教と科学」の関係の歴史的理解に基づく、宗教と科学との新しい積極的な関係構築の試み。

#### (5) 神学的科学論の展望——コミュニケーション合理性における科学論

- ①対話的状况における合意形成の条件
- ②対話的状况から、新たな体系構築へ
- ③対話的状况から神学の再構築へ

## 1. 近代の思想状況と自然神学

### 1-5: モルトマンと科学技術論

#### (0) モルトマン神学の位置

1. ユルゲン・モルトマン『わが足を広きところに——モルトマン自伝』新教出版社。

#### 第一部 青少年時代

##### 第一章 入 植

##### 第二章 一九四三年七月のゴモラ作戦

##### 第三章 戦争捕虜（一九四五—一九四八年）

#### 第二部 見習い期間

##### 第一章 ゲッティンゲンにおける神学生（一九四八—一九五二年）

##### 第二章 ヴァサーホルストの牧師（一九五三—一九五八年）

#### 第三部 初 め

##### 第一章 教会立ヴッパータール神学大学で（一九五八—一九六四年）

##### 第二章 公共的神学からボンへ

#### 第四部 希望の神学

##### 第一章 希望の神学（一九六四年）

##### 第二章 キリスト教とマルクス主義の対話の中で

##### 第三章 私のアメリカへの夢

#### 第五部 政治的神学

##### 第一章 テュービンゲンにおける第一の始まり（一九六七年）

##### 第二章 テュービンゲンにおける第二の始まり（一九六八年）

##### 第三章 全世界への講演旅行（一九六九—一九七五年）

##### 第四章 バンコクでの世界宣教会議（一九七二—七三年）

##### 第五章 極東への道（一九七三—一九七五年）

#### 第六部 新しい三位一体的思考の十字架のしるしにおいて

##### 第一章 十字架につけられた神（一九七二年）

##### 第二章 神学的地平の拡大

##### 第三章 エキュメニカルな地平の拡大

##### 第四章 場所と地位

##### 第五章 キリスト教とユダヤ教の対話

#### 第七部 未完成の完成——生の挑戦

##### 第一章 新しい三位一体的思考

##### 第二章 ギフォード・レクチャー（一九八五年）エディンバラにて——創造における神

##### 第三章 中国への私たちの長い行進（一九八五年）

##### 第四章 女性また男性として神について語る エリーザベトとの共同の神学

##### 第五章 生への新しい愛

#### 第八部 終わりの中に始まりが

##### 第一章 終わりとの始まりの祝い

##### 第二章 新しい重要点

#### 2. 森田雄三郎「現代神学の動向」（1987年）

「第三の新しい動向を代表するのは、J・モルトマンであり、彼を一躍注目させるに至ったのは、『希望の神学』（一九六四年）であったことは、あまりにも有名である。モルト

マン神学はやがて「革新の神学（革命の神学）」の展開をうながし、その後のWCCの神学的基本線を提供する。かつてバルト神学に賛同した人々のうち多くの者は、この流れに参加して行った。このようなバルト派の動向に関するかぎりでは、若きバルトが社会主義者から「神の言」の神学者へと超越して行ったのと、逆方向に向かっているとも言えよう」（41）。

「モルトマンの最初の三部作『希望の神学』、『十字架につけられた神』（一九七二年）、『霊の力における教会』（一九七五年）を読むとき、われわれはブロッホのみならず（たとい多くの言及がなされずとも）アドルノ、ハバーマスといったフランクフルト学派のいわゆる「批判的理論」の社会哲学の主張がいたるところで考慮されていることに気づくことであろう。しかし、この三部作は、その後出版された『三一神と神の国』（一九八〇年）によれば、なおプログラム提出にすぎず、本格的な方法論に基づいた神学的反省は『三一神と神の国』にはじまることを、モルトマン自身が表明している。この書以後の彼の著作を見ると、直ちに気づく新しい特色は、彼がエコロジーの神学を唱える米国のプロセス神学にかなりの接近を示している点である。したがって、ごく最近のモルトマンの神学的動向が、エコロジー的関心と、終末論的な社会行動理論とを、どのように総合するかが、彼を理解する上での一つの重要な焦点をなすとも言えよう。」（41-42）

「創造と進化——創造における無」（1990年）

- ・『希望の神学』（1964年）と『神の到来』（1995年）との終末論としての比較。
- ・隠された線としての自然神学
- ・Steven Bouma-Prediger, *The Greening of Theology. The Ecological Models of Rosemary Radford Ruether, Jesepf Sittler, and Jürgen Moltmann*, Scholars Press, 1995.

### （1）モルトマンと科学技術

#### 3. 『神学の展望——現代社会におけるキリスト教の課題』（1968）

- ・「11 希望と計画」（1966）

「神の摂理と人間の予見」、「カント」「人は、人間種族の歴史全体を自然の隠れた計画の遂行として見ることができる」、「キリスト教的希望は、未来を宿命的にタブー視してはならない。それはまた、神信仰の助けをかりて未来を放棄することができるなどと考えてはならない。しかしまた、人間が展望することのできなくなった世界の中で、「頭を上にもたげて」意義深い目標を認識し、それに向かって人間的・物質的諸力を投資する勇気を見つけるために努力すべきである。」（333）

希望・約束の地平において、人間的行為はいかなる意味を有するか。人間の計画とその実現と挫折。

#### 4. 「12 近代科学の世界における神学」（1966）

「神学と自然科学」「互いに関連なく並行して、もはや何も言うべきことがない発言の葛藤喪失状態の中にある」「互いに意味なく並行している状態」（335）、「神学と科学とは、伝承と自己自身の経験との間の葛藤という形になってきた」（336）、「精神神学と自然科学との間の溝」（337）、「様々な心理の領域」「近代精神におけるこのような複線化」（338）

「現代の科学は、現代の技術の可能性と解きがたくしっかりと結びついている。それはさらに社会全体の巨大科学と国家的計画によってなされるべき投資にかかっている。このような投資は、かかる企画によって人間を尊重する生の未来がもとめられるかぎりにおいて

S. Ashina

のみ、意味深いものとなる。ここに政治と社会全体と人が考慮すべき未来のヴィジョンとが、相互依存の関係にあることが分かる、「純粋な客観性を越えて新しい倫理を求める責任が成長してきた」(356)、「絶えざる対話においてのみ、一方科学の力と他方意味を与える人類の希望の未来の目標とが、両者お互いに媒介しあうことができる」(359)

モルトマン神学において、科学の問題は目立たなかったとは言うものの、常に意識されていた。

## 5. 『科学と知恵——自然科学と神学の対話』(2002)

### 「IX 人間的倫理と生化学的進歩の道德性 (エトス)」(1971)

「ウイルスおよびバクテリア性感染症の克服」「無菌世界というヴィジョン」、「向精神薬の発達」「痛みなき世界」、「臓器移植技術」「交換可能な身体」、「新しい優生学」、「このような人間の関心・希望・ヴィジョンに基づいて、生化学の進歩そのものが、人類の偉大な倫理的企画となります」(187)

「人間性の倫理が必要であり、苦痛の医学的緩和や病気の追放だけでなく、人間的な受け入れや、苦痛・病気・死を意識的に自分のものとなること、これらにも目をとめなければなりません。からだの秩序が人間的人格の秩序と統合されねばならないように、生医学の進歩もまた、人間性の秩序の中に統合されねばならないのです」(205)

「科学の進歩と人間の関心とは、相互的条件づけと相互的変革の途上にあります」(206)、「死は、誕生や生活と同じく人間的に重要な出来事です」、「生きる権利、死ぬ権利は」「意図的に定式化されなければなりません。そのことは、生の意味の新しいシンボルを要求します」、「人間らしい生を、受け入れられ、愛され、経験する生として理解すること」、「人間の死の決定に対しても、生の体験能力と死の意識的な受け入れが、焦眉の問題となります。」(207)

生命倫理といえ、日本ではアメリカの議論の紹介が中心となってきたが、ドイツの応用倫理も視野に入れる必要がある。

L. ジープ他『ドイツ応用倫理学の現在』ナカニシヤ出版、2002年。

## (2) モルトマンと自然神学

### 6. 『創造における神』(1985. *Gott in der Schöpfung. Ökologische Schöpfungeslehre*)

・自然神学：ストア哲学に由来。経験によって知ることができる自然ではなく、事物の本質の認識→自然＝創造とよばれる現実（有限で依存的で偶然な）。

・創造と聖書に由来する二重の神認識。

不完全であるが「自然の光」に照らされて、「自然という書物」からの神認識：良心の内なる証しによる神の先天的認識 (*notitia insita*) と、自然認識から得られた神認識とからなる。前者は直接的、後者は媒介的であるが、どちらも一般的に接近可能。不完全で不確実。

・救済論的方法での分類：楽園における神認識の「残余」、痕跡、想起。

・自然神学と啓示神学との関係：啓示神学の準備、確認、目標、代用、競争、敵としての自然神学。

(1) 教育的機能：真の神の啓示について問わせる。「信仰の明確化への前歩」(*praeambula ad articulos fidei*)

(2) 解釈学的機能：人間を信仰の理解へと導く。「信仰の知解」(*intellectus fidei*)。証明ではなく理解。

(3) 終末論的機能：栄光における神認識の先取り。

痕跡は同時に到来する栄光の反映。被造世界として世界を認識することは、この世界を将来の世界の譬えとして隠喩的に認識することである。自然的神認識はこのような機能において聖霊論に属している。

・二つの相違する神学があるのではなく、ただ一つの神学がある。この一つの神学はさまざまな条件と時代的制約下にある。自然神学は自然の国の条件における一つの神学。啓示神学は恩寵の国における一つの神学（十字架の神学、メシア的神学、旅人の神学）。栄光の神学は、栄光の国における一つの神学である。

↓

そのつど後に続く神学の形態が先立つ神学の形態を摂取している。啓示神学は歴史という条件下での自然神学。

## 7. 『神学的思考の諸経験』（1999. *Erfahrungen theologischen Denkens. Wege und Formen christlicher Theologie*）

・「I 神学とは何か」「第六節 自然神学」（神学的実存・神学者、「歴史神学」「キリスト教神学」）

キリスト教神学の前提としての自然神学／キリスト教神学の目標としての自然神学／キリスト教神学自体が真の自然神学である／キリスト教神学の課題としての自然神学

・キリスト教神学の課題→「共通の場」「共同作業」のための自然神学

「今日キリスト教神学は」「被造物の神学」は、現代の新しい生態学的危機と挑戦に立ち向かわなければならない（115-116）、「自然科学と科学技術との共同作業のために、私たちは、「自然神学」の理解の枠組みを必要としている」（116）

「様々な宗教共同体が、宗教多元的社会と地球的規模に広げられた世界において、共に生きていくに依じて、これらの宗教共同体は、そうでなければ表現できない、それらのもろもろの差異を表現できる、共通の場所を見出すであろう」（117）

「宗教性は世俗性と同様に、共通のいのちに奉仕しなければならない」

「神学、哲学と政治学が今日求めている普遍的概念は、疑いもなく宇宙である」、「私たちが知るだけでなく体験している相対的宇宙は、地球のシステムである」、「相対的に全体であり具体的に全世界」、「私たちは、大地の経済と大地の政治（E・v・ヴァイツゼッカー）、そして「大地の宗教」へ向かうであろう。「自然神学」の神学的部門にとって、この文脈は、「自然の神学」（*Theologie der Natur*）が「大地の宗教」を受け入れ、言語で明瞭に表現しなければならないことを意味している」、「地が神のために祝う「地の安息日」への畏敬の念である」、「大地の神学」（118）

### <参考文献>

0. モルトマンの主要文献は、新教出版社から翻訳が出版されている（原書は、Chr. Kaiser社から）。以下は、主要な（？）日本語の研究書。

1. 喜田川信『歴史を導く神——バルトとモルトマン』ヨルダン社、1986年。

2. 組織神学研究会編『ユルゲン・モルトマン』聖学院出版会、1998年。

大木英夫、佐藤司郎、朴憲郁、森本あんり、深井智朗

3. 沖野政弘『現代神学の動向——後期ハイデガーからモルトマンへ』創文社、1999年。

4. 森田雄三郎『現代神学はどこへ行くか』教文館、2005年。